



Title	英語の同族目的語構文の特性について
Author(s)	大庭, 幸男
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2011, 45, p. 95-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25115
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語の同族目的語構文の特性について

大庭 幸男

キーワード：同族目的語構文，同族目的語，非能格動詞，非対格動詞，項

1. はじめに

英語の自動詞は、周知のごとく、目的語をとらない。たとえば、live, smile のような自動詞では、その後に目的語としての名詞句ではなく、副詞句や前置詞句が生じる。

- (1) a. Harry lived {uneventfully / to a ripe of old age}.
- b. Bill smiled {wickedly / at me}.

しかし、これらの動詞は意味的にも形態的にも当該の動詞と関係のある名詞句をとる場合がある。

- (2) a. Harry lived an uneventful life.
- b. Bill smiled a wicked smile.

(2)では、目的語の位置に動詞 live, smile と意味的にも形態的にも関係のある life, smile を主要部とする名詞句が生じている。このような目的語とこれらを含む文は、それぞれ同族目的語 (Cognate Object) と同族目的語構文 (Cognate Object Construction (CO 構文)) と呼ばれている。

CO 構文は Sweet (1990), Poutsma (1926), Jespersen (1927), Visser (1963) などの伝統文法でも議論されている。しかし、動詞の範疇をどのように見なすかについては文法家の間で意見が分かれている。Sweet は(1)の動詞を自動詞であるとする。また、Poutsma は自動詞から転換された他動詞とする。これに対して、Jespersen, Visser は CO 構文に生じる動詞

として自動詞と他動詞の両方を認めている。

また、この CO 構文は生成文法においても議論されており、たとえば、Jones (1988) はこの構文に生じる動詞を自動詞とし、同族目的語を付加詞であるとする。Moltmann (1989) もこの種の動詞を自動詞とするが、同族目的語は事象項 (event argument) をとる述語であると考えている。これに対して、Massam (1990) は CO 構文に生じる動詞を非能格動詞から語彙的に派生された他動詞とみなし、同族目的語は事象項であると提案している。また、Macfarland (1995) は、Massam と同様に、この種の動詞を他動詞とし、同族目的語は項 (argument) であると主張している。

このように、CO 構文についてはさまざまな分析が行われており、どの分析が最も適切であるかは明確ではない。ただ、これまでの研究では、Macfarland (1995) を除いて、CO 構文の例をコーパスにあたって調査したものはないと思われる。そこで、本論文では、British National Corpus (BNC) や Corpus of Contemporary American English (COCA) などの電子コーパスを利用して、CO 構文の実態を明らかにしてみたい。

本論文の構成は次の通りである。第2節では Jones(1988), Massam(1990), Macfarland (1995) などの先行研究を概観し、第3節では Massam が指摘した CO 構文の特性について説明する。第4章では BNC や COCA を用いて CO 構文を検索してその結果を提示し、第5章ではその調査結果について考察する。そして第6章はまとめとする。

2. CO 構文に関する先行研究

2.1 Jones (1988) の分析

Jones の分析の特徴は、純粋な CO 構文とそうでない構文を区別していることである。たとえば、彼は(2)のような文を純粋な CO 構文と見なし、(3)のような文はそうではないと主張する。

(3) Sam danced a merry dance. (Jones (1988:91))

このような区別をする理由として、2つ考えられている。1つは、dance (他に、dream (例: Let Bathsheba dream a dream.) があげられている) が、(2)の動詞と異なり、(3)のような同族目的語だけではなく、(4)のような動詞と形態的に関係のない名詞句を目的語にとることである。

(4) a. Sam danced {a jig / a piece from Swan Lake / something involving lots of pirouettes}.

b. Bill dreamed {a most peculiar thing / that he was a crocodile}.

(Jones (1988:89))

もう1つは受動文の可否に関わっている。すなわち、(2)のようなCO構文は(5)のように受動文にできないが、(3)のような文は(6)のように受動文にできる。

(5) a. *An uneventful life was lived by Harry.

b. *A weary sigh was sighed by Bill.

(6) A merry dance was danced by Sam.

(Jones (1988:91))

したがって、Jonesは(2)のような文を純粋なCO構文と見なしている。また、(5)が非文法的な文であることから、(2)の同族目的語は項ではなく、付加詞である、と彼は主張している。

しかし、このような分析には問題がある。なぜなら、Jonesは(5a)のように自動詞liveを伴う純粋なCO構文は受動文にならないと主張しているが、第4節で指摘するように、BNCやCOCAにはliveを伴うCO構文が受動文に用いられている例が多数あるからである。

(7) a. Every new-built house or freshly furnished room is a fiction of the life intended to be lived there. (BNC)

- b. All his life was lived in the sight and sound of Mattie Silver,
and he could no longer conceive of its being otherwise.

(COCA)

また、彼は自動詞 live は life 以外の同族目的語をとらないと示唆しているが、BNC や COCA を検索すると、live が形態的に無関係である routine, lifetime などをとっている例が多数見られるからである。

- (8) a. In these, the subjects live a normal routine by the clock and
then, suddenly, the clock can be changed. (BNC)

- b. After reading Angelina, you get the feeling she's already
lived a lifetime. (COCA)

2.2 Massam (1990) の分析

Massam は、Jones (1988) と同様に、純粋な CO 構文とそうでない構文に分類している。前者は、(9)のように、動詞と意味的にも形態的にも関係のある同族目的語を有する文である。これに対して、後者は、(10)のように、動詞と形態的に関係のない目的語を有する文である。Massam は、後者を他動詞化を促す目的語構文 (Transitivizing Object 構文 (TO 構文)) と名づけている。

- (9) a. Henleigh smiled a wicked smile.

- b. Rosamond cried a good long cry, then she felt better.

- (10) a. Bernadette danced an Irish jig.

- b. Tosca sang an aria.

(Massam (1990:163-164))

ただ、Massam の分析は、Jones と異なり、CO 構文と TO 構文の動詞を非能格動詞から語彙従属化という規則によって派生している。たとえば、laugh, sing は非能格動詞であるが、(11a), (12a)のように用いられる場合、

これらの動詞は、(11b), (12b)のように、CAUSE-EXIST/EXPRESSED の述語に語彙的に従属化することによって目的語をとる他動詞になる。

(11) a. He laughed a mirthless laugh.

b. [x CAUSE [y_i BECOME EXIST]] [BY x *verb*]_i

(=John caused the event [John laugh] to exist by means of [John laugh])

(Massam (1990:173))

(12) a. Tosca sang an aria.

b. [x CAUSE [y BECOME EXPRESSED]] [BY x *verb*]

(=Tosca caused an aria to become expressed by means of [Tosca sing])

(Massam (1990:171))

ここで注目すべきことは、(11a)の同族目的語は従属化された行為と同一指示を付与することにより事象を表している、ということである。すなわち、主語の he は「笑う」という行為をすることによってその出来事を作り出して (create) している。これに対して、(12a)の目的語は、歌った結果、それは aria (歌曲)であったことを示す。したがって、Massam はこの目的語を結果の目的語 (result object) と呼んでいる。

Massam の分析で興味深いことは、CO 構文が(13)のように受動文にできないことを、(11b)に示されているように、同族目的語が事象によって束縛された変項 (bound variable) であることに結び付けていることである。

(13) *A silly smile was smiled (by Ethel).

(Massam (1990:164))

なぜなら、束縛変更は一般に受動文の主語にはなれないからである。

(14) a. *Her thanks were smiled by Rilla.

b. *Grateful thanks were smiled by Rilla.

(Massam (1990:180))

しかし、この分析も問題を孕んでいる。なぜなら、この分析は純粋な CO 構文が受動文になれないことを予測するが、2.1 節の(8)に示したように、反例がみられるからである。

2.3 Macfarland (1995) の分析

Macfarland (1995) は、CO 構文を動詞と意味的にも形態的にも関係のある目的語を有する文と定義している。したがって、この分析では、Massam が TO 構文と呼んでいるものは、CO 構文から除外されることになる。

また、Macfarland は、統語的な証拠をあげ、CO 構文に生じる動詞は創造動詞 (creation verb) という他動詞であり、同族目的語は結果を表す目的語 (すなわち、項) であると主張している。たとえば、wh の島を考えると、そこから取り出せるのは項のみであり、付加詞は取り出せない。

(15) a. ?What book did Chris wonder [whether Lee read t]?

b. *What day did Chris wonder [whether Lee read t]?

これを念頭に入れて、次のような例を考えると、

(16) a. ?What kind of smile did Chris wonder [whether Lee smiled t]?

b. ?What kind of dance did Chris wonder [whether Lee danced t]?

(Macfarland (1995:105))

同族目的語 smile, dance は whether 以下の wh 島から取りだされている。これは、これらの要素が、(15a) の book と同様に、項であることを示す。

Macfarland の分析は妥当であると思われるが、CO 構文に生じる同族目的語はすべて項であるのか、という疑問が生じる。

次節では、BNC や COCA にあたって、非能格動詞や非対格動詞を伴う CO 構文にはどのような特性が観察されるかについて調査したい。

3. CO 構文の特性について

2.2 節で説明したように、Massam (1990) は純粋な CO 構文と TO 構文を区別している。もちろん、彼女はすべての同族目的語構文が厳密にこの2つのタイプに分類できるとは主張していない。むしろ、この2つの間には、程度 (gradation) があるという。とは言え、どのような程度があるかについては、何も言っていない。そこで、彼女がその区別に用いた基準を手掛かりに、この種の構文の特性を明らかにしていきたい。

まず、本論文で取り扱う CO 構文を定義しておこう。ここでは、Massam や Macfarland の定義に従い、動詞と意味的にも形態的にも関係のある名詞句を目的語にとっているものを CO 構文とする。

次に、Massam が示した CO 構文の特性を概観することにする。彼女は先行研究の成果を踏まえて、(9) のような CO 構文の同族目的語は、以下にあげるような6つの特徴をもつと言う。(これに対して、(10) のような TO 構文の目的語は、通常の目的語と同様に、これらの6つの特徴をもたない。) すなわち、CO 構文の同族目的語は、(a) 受動化や話題化をすることができない、(b) 自由に代名詞化をすることができない、(c) 定性表現が認められない、(d) 同族目的語を wh 句として取り出し疑問文にすることはできない、(e) 修飾語句 (形容詞や関係節) や補部を伴わなければならない、(f) 動詞と形態的に関係のある名詞句でなければならない、という特徴をもつ。

(17) a. NO PASSIVE and TOPICALIZATION

*A silly smile was smiled (by Ethel).

*A silly simle, nobody smiled.

- b. NO FREE PRONOMINALIZATION (*it, them)
 *Maggie smiled a silly smile, then her brother smiled it.
 ?Maggie died a slow death, and her brother died one too.
- c. NO DEFINITE OBJECT POSSIBLE
 ?He lived the quiet life.
 ?She smiled the happy smile.
- d. NO CAN BE QUESTIONED
 *What did she die?
- e. YES RESTRICTIONS ON FORM OF NP
 ?He died a death.
 He died {a gruesome death / a death a warrior could be proud of}.
 He smiled a smile of peace.
- f. YES OBJECT NECESSARILY COGNATE
 *He died {a suicide/a murder}.
 *?He smiled a silly grin.

(Massam (1990:164-165))

以上をまとめると、次のようになる。

(18)

	基準 1	基準 2	基準 3	基準 4	基準 5	基準 6
CO 構文	NO	NO	NO	NO	YES	YES

*基準 1：受動化・話題化、基準 2：代名詞化、基準 3：定性表現、基準 4：疑問文化、基準 5：修飾語句・補部の制限、基準 6：同族目的語の制限

*基準 1～4 の NO は、それぞれ受動化・話題化、代名詞化、定性表現、疑問文化が不可能であることを示す。また、基準 5, 6 の YES は、それぞれ同族目的語に修飾語句や補部が必要であること、目的語が同族目的語でなければならないことを示す。

4. 電子コーパス BNC や COCA における CO 構文の調査結果

本節では、BNC や COCA を検索し、CO 構文にはどのような特性が観察されるかを明らかにする。取り上げる動詞は次の通りである。

(19) 語群 1 : sing, fight

語群 2 : live, laugh

語群 3 : smile, jump

語群 4 : scream, drink

語群 5 : run, cry

語群 6 : die, blush

語群 7 : grow, fall

語群 1～2 は他動詞性が強いと思われる (非能格) 動詞であり、語群 3～5 はいわゆる非能格動詞と呼ばれている動詞である。また、語群 6 は非能格動詞であるか、あるいは、非対格動詞であるか、その範疇が不明な動詞である。そして、語群 7 は非対格動詞と呼ばれている動詞である。

ここで、基準 2 (代名詞化) と基準 4 (疑問文化) について、コメントしておきたい。Massam は基準 2 の同族目的語の代名詞化には制限があると述べている。なぜなら、同族目的語は創造された被動者 (patient) であり、そのような被動者は、(17b) のように、2 回創造されることはない (No created patient can be created twice. (181 頁)) からである。本論文では、全ての語群の動詞に対して、このことも念頭に入れて、同族目的語が代名詞化されるかどうかを見ることにする。

また、Massam は基準 4 (疑問文化) についても、同族目的語を (17d) ように聞くのは不自然である、と述べている。なぜなら、同族目的語を聞くことは、語彙的な内容を聞くことになるからである。しかし、次のような疑問文は語彙的な内容を聞く疑問文ではないので、文法的であるとする。

(20) What kind of laugh did she laugh? (Massam (1990:181))

本論文では、全ての語群の動詞に対して、このことも念頭に入れて CO 構文が wh 疑問文として用いられているかどうかを見ることにする。

4.1 語群 1 について

4.1.1 動詞 sing の場合

動詞 sing を伴う CO 構文では、(18)の特性（基準 1～6）を示さないような例が多数確認できた。なお、以下の例では、その出典元の BNC, COCA を省略している。

- (21) a. **A new song must be sung**, played, hummed, and drummed into the ears of the public, not in one city alone, but in every city, town and village, before it ever becomes popular.
- b. This is **a good song** because it not only has actions but can also be sung by two groups at the same time.
- c. There are two main ways of **singing the songs** after the first verse.
- d. I'd have given birth to twins and discovered **what song the Sirens sang**, and vaporized and condensed and fallen as snow all over central Calcutta.
- e. Then they **sang a song**, and said farewell with "Good-bye."
- f. The Port Ellen Sacred Harmony Class **sang a few anthems** and Miss Shaw played the piano.

(21a)は受動文であり、(21b)は同族目的語が代名詞化された例である。また、(21c)は同族目的語が the を伴う例であり、(21d)は同族目的語を wh 句とした疑問文である。そして、(21e)は同族目的語が形容詞や関係節や補部を伴っていない例であり、(21f)は同族目的語 song 以外の目的語

をとっている例である。なお、(21f)の目的語は *anthem* であるが、それ以外に *hymn ballad, verse* などの多種多様な目的語が用いられていた。

4.1.2 動詞 *fight* の場合

動詞 *fight* を伴う CO 構文では、上記の *sing* の場合と同様に、(18)の特性（基準 1～6）を示さないような例が多数確認できた。

- (22) a. **The fight we have witnessed between eagle and man has been fought** many times in many places and will be fought again.
- b. But if you know how to **fight a good fight**, it can actually bring you closer because you're able to lay out what's bothering you and work through your problems together.
- c. So in contrast to the mediator, who fears and avoids conflict, the followers of Jesus are fully equipped to **fight the good fight of faith**.
- d. Guatemala remains a terrible reminder of **what Nicaraguans have fought** so long and hard to replace.
- e. But it's the sorta thing I'd expect to hear from older people who've been **fighting a fight** and aren't interested in anything I'm doing.
- f. Talking to Murtach was like **fighting a duel** at times.

なお、(22f)では、動詞 *fight* の目的語として *duel* が生じているが、このほかには *battle, bout, war, campaign, election* などが用いられていた。

4.2 語群 2 について

4.2.1 動詞 live の場合

動詞 live を伴う CO 構文でも、上記の sing, fight の場合と同様に、(18) の特性 (基準 1 ~ 6) を示さないような例が多数確認できた。

- (23) a. School life is lived in a society that is constituted in the course of lessons.
- b. I wondered if Charlie really knew this, felt this, or whether his life as he lived it from day to day was as fucked-up and perplexed as everyone else's.
- c. We want to know what to believe, what to do, how to live the godly life.
- d. I can not help feeling that the life Anna lived was at least lived in every sense of the word, rather than spent miserably, in gossip and the petty concerns of the women around her.
- e. Of course G.P. has lived a life and has views that would make Mr Knightley turn in his grave.
- f. All this time you've been living a dream, and now you've seen that dream in the flesh you torment yourself even more.

(23a) は受動文であるが、話題化文も確認することができた。

- (24) My whole life, I lived in Eggroll Wonderland.

また、(23b) は同族目的語を it で受けているが、one で受けている例も確認できた。

- (25) Somehow, since being at Vetch Street, working so hard, and living a life so different from her old one, many events in her

past had taken on a different colour.

(23d)は、同族目的語を wh 句とする疑問文ではない。むしろ、この例は同族目的語を空演算子とする関係節である。しかし、同族目的語が wh 要素として移動していることに違いはない。

(23e)では、同族目的語に定冠詞がついているが、無冠詞の例もあった。

(26) He's **lived life** in a tiny community, a respected member of his class.

また、(23f)では、同族目的語 life の代わりに dream が用いられているが、これ以外に(8)で示した routine, lifetime や order, reality, day, lie, act, struggle などの表現が用いられていた。

4.2.2 動詞 laugh の場合

動詞 laugh を伴う CO 構文では、基準1（受動化・話題化）に反する例は見つからなかった。しかし、基準2（代名詞化）、基準3（定性表現）、基準4（疑問文化）、基準5（修飾語句・補部の制限）については、次のような反例が見つかった。

(27) He **laughed a laugh** that was neither bitter nor indignant, only baffled that it should be so.

(28) a. They all **laughed that laugh** again.

b. Margaret **laughed her billy goat laugh**.

(29) …but I'll tell you **what I'll laugh** like hell if I get the iron!

(30) She **laughed a laugh** without humor.

基準6（同族目的語の制限）については、laugh 以外に次のような表現が用いられている例があった。興味深いことに、いずれも動詞の後にコンマがあった。

(31) a. The bear-leader **laughed, a throaty giggle**.

- b. Once, while waiting for Kerrison to arrive, Doyle had actually **laughed, a hearty guffaw**, filling the hollow.
- c. Roman **laughed, his musical chuckle** making her laugh in her turn.

4.3 語群3について

4.3.1 動詞 **smile** の場合

動詞 **smile** を伴う CO 構文では、基準 1 (受動化・話題化)、基準 4 (疑問文化) に反する例は見つからなかった。しかし、基準 2 (代名詞化)、基準 3 (定性表現)、基準 5 (修飾語句・補部の制限)、基準 6 (同族目的語の制限) については、次のような反例が見つかった。

- (32) a. Lisa **smiled a wry smile**. It was quite a litany of aggression even though on at least one count she was entirely innocent!
- b. She had my present in her hand and was **smiling a merry Christmas-morning smile**. To my eyes **this** made her look like a strip-dancer at a funeral.
- (33) a. The agency nurse had folded her arms and **smiled the smile** of someone competent and in control.
- b. She **smiled the special smile** which was so rare and which lit up her grey eyes.
- (34) Then he turns to the crowd, **smiling a smile** without humor, speaking loudly.
- (35) a. One of the girls walked over to the time traveller and **smiled a genuine welcoming grin**.
- b. Kit **smiled a terrible twisted grimace**.

(35)では、目的語に grin, grimace のような名詞が生じているが、それ以外にも promise, greeting, acknowledgement, polite, leer, goodnight, challenge, thank you, hello, face (full of teeth) などが目的語として用いられていた。なお、grin については、a wolfish grin, a beatific grin, a gap-toothed grin, a genuine welcoming, his idiotic grin などたくさんの表現があった。

4.3.2 動詞 jump の場合

動詞 jump を伴う CO 構文では、基準 1 (受動化・話題化) と基準 4 (疑問文化) に反する例は見つからなかった。基準 2 (代名詞化) と基準 3 (定性表現) については、それぞれ次のような例があった。なお、(36)は基準 5 (修飾語句・補部の制限) の反例にもあたる。

(36) If you tell him to **jump a jump** twice, he does it; but when you tell him to jump it a third time, he says, "I've had it, I've done it twice and I'm not going to do it again!"

(37) "We're just beginning," Harville said, "Used to be where I wouldn't even **jump the jumps**."

基準 6 (同族目的語の制限) については、次のような例が観察された。

(38) a. Then he let go of me and did as I'd told him, **jumped a great leap**.

b. I have often referred to my own fear when I was first required to make a horse **jump a fence**.

(38) のような leap, fence のほかにも、ditch, multi-ethnic feudal state, gap, vertical hole, wall などが観察された。

4.4 語群4について

4.4.1 動詞 scream の場合

動詞 scream を伴う CO 構文では、基準1（受動化・話題化）と基準2（代名詞化）に関する例は見つからなかった。これに対して、基準3（定性表現）、基準4（疑問文化）、基準5（修飾語句・補部の制限）、基準6（同族目的語の制限）については、ごく少数であるが、それぞれ次のような例が観察された。

- (39) He was screaming, the high-pitched, nerve-grating scream of agony that always turned Kathleen's blood to stone, and the waiting-room fell into shocked silence.
- (40) What was it she screamed at you, some gypsy curse?
- (41) Among the newest rumors about Spelling is that she can scream a scream to make your ears fall off.
- (42) a. He tried to scream the name but his throat felt as if it had been cauterized with a hot iron.
- b. When finally he grabbed the ropes which secured her, and shot his load deep inside her pulsing jewel, she screamed a combination of thankful relief and dark ecstasy.

基準6（同族目的語の制限）では、(42)のような name, a combination of thankful relief and dark ecstasy 以外にも a torrent of abuse, words などの表現が同族目的語 scream の代わりに用いられていた。

4.4.2 動詞 drink の場合

動詞 drink を伴う CO 構文では、基準1（受動化・話題化）、基準2（代名詞化）、基準4（疑問詞化）に反する例を確認することはできなかった。それ以外の基準3（定性表現）、基準5（修飾語句・補部の制限）、基準6（同

族目的語の制限) については、それらに反する例を確認することできた。

- (43) a. We **drank the drink** and both of us went to bed and sleep.
 b. I **drank all the drink** myself so that he could n't have it,
 and now I don't feel terribly well.
- (44) a. Oh just, thanks, I just **drank a drink**.
 b. Because her daddy **drink drinks** in there in the pub.
- (45) a. He sat down again on the very edge of the chair and they
drank the tea in silence.
 b. And er they used to get them to take these pills they said
 and they used to **drink a bottle of gin, keep drinking gin**.

なお、(45) では、drink の代わりに tea, gin が用いられているが、それ以外にも soup, a glass of water, beer, whisky など多くの表現が用いられていた。

4.5 語群 5 について

4.5.1 動詞 run の場合

動詞 run を伴う CO 構文では、基準 1 (受動化・話題化) と基準 2 (代名詞化)、基準 4 (疑問文化)、基準 5 (修飾語句・補部の制限) に関する例は見つからなかった。これに対して、基準 3 (定性表現)、基準 6 (同族目的語の制限) については、それぞれ次のような例があった。

- (46) a. He **ran his fastest run** we have ever seen.
 b. To have **run the most glorious run** of your life, to have become the first European to break ten seconds, to do it in an Olympic final — and then to be falsely accused of drug-taking by an officialdom that was frantically sniffing out Ben Johnsons like a Salem witchfinder!

- (47) a. The rest of us are **running a different race** — by choice perhaps.
- b. He had the entertaining idea of **running a competition**, and he advertised for experts in games theory to submit strategies.

4.5.2 動詞 cry の場合

動詞 cry を伴う CO 構文では、基準 1 (受動化・話題化)、基準 2 (代名詞化)、基準 3 (定性表現)、基準 5 (修飾語句・補部の制限) についての反例はなかったが、基準 4 (疑問文化) と基準 6 (同族目的語の制限) に関するものとして、それぞれ(48), (49)のような例が観察された。

(48) What shall I **cry**?

(49) a. The Wolverines' borrowed silks lent them invaluable seconds wherein to close with those guards and sever their throats before they could fire or even **cry a warning**.

b. I **cried a torrent of tears**.

(49) の warning, tears 以外には、pity, wonder, scream, wail, murder などとも用いられていた。

4.6 語群 6 について

4.6.1 動詞 die の場合

動詞 die は非能格動詞とも非対格動詞とも言われ、その範疇は明確ではない。動詞 die を伴う文では、基準 1 (受動化・話題化)、基準 2 (代名詞化)、基準 4 (疑問文化) の反例は見つからなかった。しかし、基準 3 (定性表現) の反例は多数あった。

(50) a. He **died the death of an actor**.

- b. If you intend to fight a missile duel, the chances are that most of your highly mobile force will attract a disproportionate amount of your enemy's firepower and will **die the death**.

また、基準 5（修飾語句・補部の制限）については、数例ではあるが、次のような反例があった。

- (51) a. … this way it stays exciting and sometimes I pull it off and sometimes I **die a death**.

- b. What a way to **die death!**

最後に、基準 6（同族目的語の制限）については、die が death 以外の目的語を取る例として、次のような例があった。

- (52) a. People would obviously conclude that I had **died a coward**.

- b. He kept a diary of his sex dreams but **died a virgin**.

die の目的語として、(52) の coward, a vergin 以外に、recluse, man alone, millionaire, ruined man, bachelor などが用いられていた。

4.6.2 動詞 blush の場合

動詞 blush も、die と同様に、非能格動詞とも非対格動詞とも言われ、その範疇は明確ではない。この動詞を伴う CO 構文の例は観察されなかった。したがって、基準 1（受動化・話題化）、基準 2（代名詞化）、基準 3（定性表現）、基準 4（疑問文化）、基準 5（修飾語句・補部の制限）に対する反例は当然見当たらなかった。基準 6（同族目的語の制限）については、次のような例があった。

- (53) a. The whole of Miss Honey's pale and pleasant face **blushed a brilliant scarlet**.

- b. The nun's face **blushed a deeper crimson**.

(53)では、動詞 flush の目的語として scarlet, crimson が用いられているが、このほかに a deep pink, a fiery red など色彩表現が多く用いられている。

4.7 語群 7

4.7.1 動詞 grow の場合

非対格動詞 grow を有する CO 構文では、事例そのものが観察できなかった。基準 6 (同族目的語の制限) については、つぎのような例があった。

- (54) He composed his blends not only according to the flavour of the juice, but also according to what the weather had been like that year — an early or late development, depending on the amount of cold or rain there had been — and according to whether the vines had **grown a rich or mediocre foliage**.

4.7.2 動詞 fall について

非対格動詞 fall の CO 構文についても、事例そのものが確認できなかった。なお、基準 6 については、次のような例があった。

- (55) All afternoon Fiona kept me close by her side, looking around for me any time I **fell a step** behind.

5. 調査結果

これまでの調査結果を表にまとめると次のようになる。

(56)

		基準 1	基準 2	基準 3	基準 4	基準 5	基準 6
語群 1	sing	YES	YES	YES	YES	NO	NO
	fight	YES	YES	YES	YES	NO	NO
語群 2	live	YES	YES	YES	YES	NO	NO
	laugh	—	YES	YES	YES	NO	NO
語群 3	smile	—	YES	YES	—	NO	NO
	jump	—	YES	YES	—	NO	NO
語群 4	scream	—	—	YES	YES	NO	NO
	drink	—	—	YES	—	NO	NO
語群 5	run	—	—	YES	—	—	NO
	cry	—	—	—	YES	—	NO
語群 6	die	—	—	YES	—	NO	NO
	blush	—	—	—	—	—	NO
語群 7	grow	—	—	—	—	—	NO
	fall	—	—	—	—	—	NO

* 基準 1～4 の YES は、それぞれ受動化や話題化、代名詞化、定性表現、疑問文化が可能であることを示す。これに対して、一は受動化や話題化、代名詞化、定性表現、疑問文化の例が見つからなかったことを意味する。

* 基準 5、6 の NO は、それぞれ同族目的語が修飾語句や補部を伴わなければならないという制限がないことや目的語が同族目的語でなければならないという制限がないことを示す。一方、一はそのような制限に関する例が見つからなかったことを意味する。

この表から分かることは、次のようなことである。まず第 1 は Jones (1988) に関する。Jones は(2)のような同族目的語 an uneventful life, a wicked smile が項ではなく、付加詞であると主張している。この分析に従えば、これらの同族目的語は代名詞化されないことを予測する。しかし、その予測は正しくない。なぜなら、(56)に示すように、life, smile などの

同族目的語は代名詞化できるからである。したがって、今回の調査結果より、純粋な CO 構文とそうでない構文を分ける分析は適切ではないと言える。

第2は Massam (1990) に関する。彼女は、2節で指摘したように、非能格動詞を伴う CO 構文は受動文になれない、と主張している。しかし、今回の調査結果から、動詞 live を伴う CO 構文は受動文になれることが判明した。したがって、Massam の分析は妥当であるとは言えないようである。

第3は Macfarland (1995) に関する。彼は非能格動詞と伴う CO 構文の同族目的語が項であると主張している。もしこれが正しいならば、非能格動詞を伴う同族目的語は表(18)と反対の振舞いを全ての動詞がする筈である。しかし、実際には基準1から6に違反する状況は、動詞によって異なる。したがって、非能格動詞を伴う CO 構文の目的語は一律に項であるとは言えないのではないか、と思われる。

今回の調査結果より、語群1、2の動詞の同族目的語は、項であると言える。しかし、語群3～4の動詞の同族目的語については、項の可能性は順次低くなっていると言えそうである。さらに、語群5、6の動詞 run, die などの同族目的語は項の可能性がもっと低いと思われる。また、blush や非対格動詞 grow, fall については、同族目的語構文は観察されなかった。

6. まとめ

本論文は、CO 構文の先行研究の成果を踏まえつつ、電子コーパスを用いて、CO 構文の実際の使用状況を調査・確認した。その結果は表(56)の通りである。この表から、先行研究でなされている分析は CO 構文の特性をすべて説明しているとは言えないようである。

参考文献

- Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part IV, George Allen & Unwin, London.
- Jones, Michael Allen (1988) "Cognate Objects and the Case-Filter," *Journal of Linguistics* 24, 89-110.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (2004) *Functional Constraints in Grammar*, Benjamins, Amsterdam.
- Macfarland, Talke (1995) *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*, Doctoral dissertation, Northwestern University.
- Massam, Diane (1990) "Cognate Objects as Thematic Objects," *Canadian Journal of Linguistics* 35, 161-190.
- Matsumoto, Masumi (1996) "Alternation of Unergative Verbs in English and Japanese: An Analysis of the Cognate Object Construction," *Kansai Linguistic Society* 16, 23-33.
- Moltmann, Frederika (1990) "Nominal and Clausal Event Predicates," *CLS* 25, 300-314.
- Poutsma, Hendrik (1926) *A Grammar of Late Modern English*, Part II, Sec. II, Noordhoff, Groningen.
- Sweet, Henry (1990) *A New English Grammar*, Oxford University Press, London.
- Visser, Frederik Theodoor (1963) *A Historical Syntax of the English Language*, E. J. Leiden.

SUMMARY

Properties of English Cognate Object Constructions

Yukio OBA

This paper is mainly concerned with English cognate object (CO) constructions such as those in (1):

- (1) a. John lived a happy life.
- b. Bill smiled a silly smile.

To begin with, I briefly reviewed previous analyses like Jones (1988), Massam (1990) and Macfarland (1995). After showing the six properties of CO constructions pointed out by Massam (1990), I searched the British National Corpus and the Corpus American Contemporary English for CO constructions with 7 types of verbs, and examined whether the six properties mentioned above are found out in the data of CO constructions which are collected from these corpuses.

Macfarland concludes that the cognate objects are the arguments of the verbs in the CO constructions. However, the examples of the data reveal that there is a gradation in the argumenthood of the cognate objects in terms of the kinds of verbs occurring in the CO constructions.